

良、絃旭昇▼本能寺1旭翠、旭村、絃旭濤、旭香▼小栗栖1旭照、旭榮、絃旭昇、小絃旭好▼五條橋1旭榮、旭輝、絃旭濤、旭香▼大楠公1旭扇、絃旭昇▼湖水渡1岸原旭正▼堅田落1伴旭友▼あつもり1旭恵、絃旭操、旭暢、小絃旭桂、立方一▼娘みゆき1旭晨、絃旭昇▼粟津の露1旭華、絃旭昇、小絃旭好▼曾我兄弟1旭孝、絃旭操▼衣川1旭富、絃旭登▼伊吹嵐1丸尾旭室▼坂崎出羽守1旭楓、絃旭暢、小絃旭桂▼柳の精1樋口旭総▼若き敦盛1旭光、旭鳳、絃旭操、旭晨▼忠度1旭濤、絃旭岡▼壺坂寺1旭水、絃旭岡▼名槍日本号1旭兜、絃旭操、小絃旭璋、立方一▼松岡先生を讃えて1秋元旭晨▼挨拶1松岡旭岡▼姫ゆりの塔1能勢旭陽▼安宅の関1塩谷旭洲▼新撰組1中島旭穂▼大物の浦1坂井旭蘭▼羅生門1若宮旭登▼回天義拳1奥村旭美▼薩摩の乙女1梅原旭濤▼大石主税1宮垣旭璋▼吉野山懐古1旭将、絃旭桂、旭鳳、立方一▼伽羅の兜1八千代、絃旭操、旭暢、旭濤、立方一▼綱領1旭鳳、旭山、旭桂▼お蝶夫人1旭瑞常、絃旭昇、尺八入▼院の庄1旭暢、絃旭操、旭濤、旭将、小絃旭桂▼断琴1坂田旭弘▼二〇三高地1旭昇、小絃旭好▼養老1田中旭照▼菅原道実1喜多旭修▼一休禅師1松岡旭岡▼黒田節1全員大合奏、立方一。

大越綾水、若水滴水両師追悼演奏会
六月五日(日)屋形時半新瀧厚生年金会館、主催
催水会、後援BSN新潟放送局外。天野屋
利兵衛1菅野暁水▼西郷隆盛1田沢衆水▼本
能寺1鈴木柳水▼姫百合の塔1土田宴水▼五
十嵐雅水▼巖流島1古山湖水▼新撰組1加藤
友水▼景清1後藤甚水▼大和懐古1沢田桜繪
▼川中島1富岡葺水▼村上喜剣1結城越水▼
竜の口1小島止水▼勸進帳1中里千水、中里

俊水、絃土田宴水▼耳なし芳一(来賓)水藤五郎。
日本琵琶楽協会の定例研究会
六月十二日(日)屋形時東京文京区向丘海蔵寺(五百円)。滝口入道1高田登水▼伊藤公1宮武旭豊▼鉢の木1大塚岳峻▼花の敦盛1木原綾子▼講演言葉と歌1文学博士金田一春彦
京都琵琶協会六月定例茶話会
六月十二日(日)屋形神戸市平野会館(次号詳細)。
ものがたり琵琶演奏会
六月十三日(月)夕五時東京上野本牧亭、主催
雅俊杉山旗水後援会、司会大場穂苑(千円)。
異国の丘1菅野有水▼屋島の誉1大関英子▼接待1高田登水▼白虎隊1座間登水▼湖水乗切1二反田岳水▼青山播磨1旗水、登水、長谷川錦舟、絃都錦穂▼柳の精1若宮旭登、三味線平田旭舟▼井伊大老1山口速水▼物語琵琶修善寺物語1会主杉山旗水▼天目山1浅野晴風。

テレビ・ラヂオで琵琶放送
●六月九日(日)休屋三時NHK・FMラヂオ、「扇の的」都錦穂、「川中島」山口速水両氏放送。
●六月九日(日)夜十一時半毎日テレビ、天津八千代女史「常陸丸」放映。
●六月十五日(日)夜八時十五分NHK教育テレビ、鶴田錦史氏「敦盛」放映。

京都琵琶協会七月定例茶話会 七月三日(日)

晴風夏季例会 七月十二日(日)夕六時東京杉並区高円寺会館、会主浅野晴風氏。
第八回関西琵琶新進演奏会 七月十七日(日)屋形大阪北区天神筋朝陽会館、主催小川吟水氏。東京前田秋声、名古屋阿部勝水、京都平井春嶺、徳島内田欽水各氏外ゲスト出演。
祇園祭八坂神社琵琶奉納演奏会 七月二十三日(日)夕五時京都東山四條八坂神社能楽殿、協賛京都琵琶協会(十数人出演)。

きごとあ
うっとり梅雨期、琵琶楽器のお守りに苦勞する●十六回連載の坂本錦道先生「薩摩琵琶とその周辺」で薩摩琵琶の興亡から乃木大将、広瀨中佐、東郷元帥等の功績を讃え日清日露の面戦捷で世界の一等国となった日本の記事は好評裡に前号で一応擲筆された●今秋から又稿を新たに執筆することになっている
●琵琶に馴染の深い西郷隆盛を論じた毛利敏彦先生の「西南戦争百年と現代」は本号で完結し次号から北大教授田中彰先生執筆の同問題を掲載の予定である●共に御期待を乞う●本号は各地で催される●其に御期待を乞う●の貴重な御寄稿が次号廻しとなった。不悪。

昭和五十二年七月一日発行(非売品)
編集者 植村 真
発行所 高槻市津之江北町一ノ二番
電話〇七三六(七三)六〇五一番

琵琶 機関紙

京 結

第二七七号 京 絃 社

西南戦争百年と現代(二) — 征韓論政変の真相と西郷 —

毛利 敏彦



士族の没落をいっそうすすめたのは、かれらの家禄受給特権をとりあげた秩禄処分であった。士族の生活を支えたのは主君から給付される家禄であり、廃藩後は政府が肩代わりしていた。しかし、財政難の政府は、家禄支出の重荷から脱却するため、一定の金額とひきかえに家禄支給の打ち切りを計画した。いわば家禄の買いつぶしである。そして、その源資を外債にもとめることにした。このとき、参議として大蔵省の事務を監督していた西郷は、アメリカ滞在中の大久保大蔵卿にあてて、「家禄消却の方法相い立て、三千万円だけ米国より借り入れ候つもりに相決し、此の機会失うべからず、両全の良法と存じ奉り候」と手紙を送り、秩禄処分への積極的意向を表明した。他の資料とあわせて考察すれば、これは西郷の真意とみなして間違いない、西郷は士族の解消にすすんで手をかけたのである。これが士族の大親分のすることであろうか。

そして、士族の存在にとどめをさしたのには、明治六年の徴兵制実施であった。士族のみが武装を許され軍事を専門に担当するという職業的特権が奪われたのである。大小二本差し(双刀)が武士を象徴していたことを考えると、徴兵制の実現が士族にとって致命的であったのはいうまでもなからう。西郷は徴兵制に対しても相当積極的な賛意を示していたと推定できる史料がいくつもある。すくなくとも、西郷が徴兵制に反対したとする史料は見当たらない。

このように、この時期の重要な士族解消政策、つまり廃藩置県、秩禄処分、徴兵制のすべてにたいして、西郷は賛成の立場にたっていた。ただひとりの陸軍大将かつ筆頭参議であった西郷の地位を考えると、この事実はいきわめて重要ではなからうか。政府内に占める重みから考えて、西郷が反対しないまでも消極的態度をみせただけで、これら諸政策の

実行は困難になったであろう。換言すれば、西郷は、決して士族の大親分ではなく、むしろそれと正反対の立場にあつたとみなしうる。したがって、西郷が士族のために征韓を欲することはあり得なかつたと結論できる。征韓論政策は、外征派対内治派の対立からおきたというよりも、他に原因があつたとすべきであり、もちろん征韓論が主因ではなかつた。通説は歴史の真相を正しくつたえていないといふべきであろう。

では、征韓論政変の真因は何であつたのだろうか。そこには様々の要因が錯綜しているが、その重要なひとつとして、明治政府をめぐる疑獄事件のみみ消しに關係があつたと推定できる。いわば明治のロッキード隠しであつたわたくしのみるところでは、その仕掛け人は前大蔵大輔(大蔵次官)伊藤博文に間違いない。標的は司法卿から参議になつた江藤新平であり、西郷はそのとばかりをうけた犠牲者であつた。

とにかく、征韓論政変の真相が通説どおりでないとなれば、政変に端を発する自由民権運動や士族反乱、西南戦争、ひいては日本の立憲制についての従来の解釈にも再検討が必要となり、日本近代史はかなり書き換えられねばならなくなるであろう。西南戦争百年を機会に征韓論政変再検討の機運がたかまるのを期待したい。この項終り!



六十五年(四九)

西郷 天風

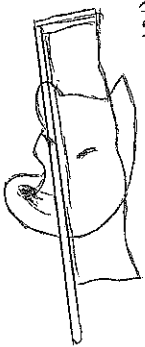
ほど近き神田須田町では、電車乗替のさわめきもすでに終りをづけ、広瀬中佐銅像のうしろ側あたりで、もう三時か、と叫ぶ四、五人の酔いどれが、賑やかに立去って急に静まりかえれば、もう数ヶ所の屋合店は姿を消したらしく、一人呑み足らぬ風情の鶴殿師、

「時間ですから」と断わる屋合主には目もくれず、私の帰る方向を聞きだすのであった。当時私は、小石川護国寺裡の、墓地裡駅附近に住まっていた。鶴殿師は、タクシーを拾うべく待つて見たが、空車は一向に姿を見せず、

「ここに待つて居れよ。」と云いのこして薄暗がり消え、暫くして一台の円タクに乗込んで来るなり、既に酔いっぶれて、うずくまってる私を抱えるようにして車内に入れ、運転手に行く手を指図しているが、夢心地の私にはハッキリ聞き取れなかった。

見当つかず、どうやら見覚えのない通りを走っていることに気付いた時、鶴殿師笑いながら、「まあ、おれに任せておけよ」と取合わない。かくて彼は一時間も走ったと思ふ頃、車から引き降された私は、左手の暗がりの中に恐ろしくつかい建物を影画のようになり、此所は何処だ?と思わず舌気を強めた。鶴殿師、至って応揚に、

云うのは、三、四日前から自宅の隣の家、つまり一ツ橋高等商業学校(現在商科大学)英語教師邸の裏口から、吹風家の庭園を前景として描き続けている油画を、此の時の様な天気の良い日に描き上げるべく待期していたので、一刻も早く帰りたいからだった。よく熟睡している様子の、隣の床に眼をやれば、ようやく薄暗がり馴れてきた眼に写る姿は、ナント、鶴殿師ならぬ、投げ島田のなまめかしい寝姿であった。



続。私の音楽ノート(六)

水藤 五郎

映画の夢

先日、映画の切符を買いました。ロードショーの前売券で、千三百円が三百円安くなって、丁度千円でありました。近頃はあまり映画を見なくなり、三ヶ月に一度見るかどうか、それ故、久し振りの切符でありました。

この様な映画不 viewer は私のみではなくて、テレビにかじりついている家庭婦人を始め、子供の多くが、めったに映画館には行かなくなり、大宅荘の一億総ハタチ論から端を発して、テレビ無用論、テレビ公害等と

数多くの攻撃がくり返され乍ら、テレビの勢力はなかなか強く、既に二十年あまりの歳月が流れました。そして、この間が映画の暗黒時代でもあったわけですが、

二つの対立する文化の様に思われている、テレビと映画の今後は一体どうなるのでしょうか。それが、一つの文化の生死をかけた攻防であるとするならば、我々は無関心ではいられない様に思えます。

私の求めた切符は、新田次郎原作「八甲田死の彷徨」の映画化「あゝ八甲田山」であります。この映画化の為に、三年間の八甲田雪のロケーションを行ない、数億円に昇る巨費を投じての撮影が行なわれたと記されています。明治三十五年の冬、雪の八甲田山を舞台にした惨劇は、それを人間的に無意味な、軍人主義行為であったとして、戦後は全く軽べつされ、話題にすらなりません。

我々の知識には、この八甲田山を主題にした「琵琶歌」があり、それを通して、この事実を思い起こし、そこに命を落としていった人々の壮烈な魂をくみとって涙してきました。敢えて云えば、戦後生まれの、東京育ちの私には全く無縁の内容でした。その私にとって、八甲田山の映画化と聞いてもあまり興味を抱くものでもありませんでした。これは三年前に、八甲田山へのロケーションがニュースとして伝わった時の実感でした。そして、封切間近の先日、私の心に一案が生じたのが、今回の切符購入となったのですが、その一案

とは、この「八甲田事件」を映画でどこまで写し出せるか、そして、原作との比較はどうか、これ等を観察してみようと思つたことでした。その事件の内容についての問題ではなく、むしろ、それを芸術家として、映画人が、作家が、如何にとらえて写し出せるか、文に出来るかを知り得る限り見てみようと思つていました。

六月十八日の封切りに備えて、原作をも読み出しました。時折り原作の小説を読んでいたために、テレビ化されたドラマが、実に面白くない作品に感じたりして、その原作者の力量を再評価することがあります。これは、映画でもよくあったことでした。今回はどうなるか、たゞ、これは作者と云つても、事件は事実であつて、作者もその限りでは、一人の芸術家として、文章を通してそれを再現する技量を問われるのであつて、映画作品との比較にも耐えなければならぬ立場にもあります。読者や観客にとって、如何に心を打つものであるかが大切な要件になります。

琵琶人がこの物語を弾する時も、全く同様なことが云えるでしょう。映画を見て、それが深く感動を与える作品であつたら、それに負けない感動の要素を歌に向ける必要があるでしょう。又、その反対に、感動の乏しい作品であれば、その原因を見るのです。今や、テレビに娯楽の王座を奪われた映画が、映画人の必死の努力で、八甲田山の死の彷徨を描き出そうとしている。その作品の成

功、不成功は、映画館に入ってスクリーンに見入る我々自身が決定し、そして、その行方を確定してゆくのであります。

明日の伝承も不安な状況にある「琵琶楽」のかきならし、語り出す「八甲田山」が、或は成功、不成功に終るか、既に、不成功に傾きつつある今日ではあっても、映画人の努力をくみとるならば未だ夢を捨て難いものかもしれない。勿論、死に至る努力が必ずやらねばならぬ。死に、敢えてそれに挑戦していった人々、しかし、そこには軍人精神の強さと、それに相反する非合理性が説かれていきます。

とかく戦前は、この前者に視点が向けられて、軍人の魂として尊ばれ、それが死に至った悲事を嘆きうたいました。が、今日の我々は、後者の面、無謀にも、準備不足を知り乍ら、且つ、隊編成の不合理を感じながら、上官の命令に従わざるを得ぬものとして、出発してゆく神田少尉の姿に、軍隊の中の人間のせつなさを感じるのであります。

そのどちらを強調するかは、芸術家の自由でありましょう。又、今日はそれが保障されているはずで、その意味では、戦前の作詞・作調になる八甲田山の琵琶歌も、この辺で再吟味する時がきたのかもしれない。



上手な人とは

山口 豊水



自動車運転の上手な人は、と云えば、やら早く走る人でも機械構造修理などに精通している人でもなく、客席に乗った人が全く神経を使うことなく、居眠りをしていても、目的地へ確実に行って呉れる人、そういう人を云うのであらうと思う。

では、琵琶の上手な人はと云えば、大体次ぎの三通りぐらいに分けられる。(1)は、歌は上手、弾法も大変巧い、誠に結構な申し分のない弾奏であるが、閉会後はさっぱり忘れられてしまう人。

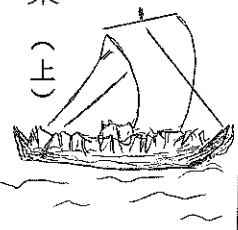
(2)は、是れまた歌絃ともに極めて優秀であるが、張りつめた気持ちばかりで、聴く側からは一触即発が感じられ、肩の凝る人。

(3)は、歌も弾法もそれぞれ格別優秀と云うほどではないが、歌絃速度の調和がよくとれていて、大変気持ちよく聴くことが出来、帰途でも、今日はあの人良かったと後まで思い出に残る人。

このように分けて考えると、(3)の形の人が本当に上手な人である。と私は思っている。

桐一葉 (上)

那 恵



長柄堤の訣別

「晨鷄再び鳴いて残月薄く、征馬しきりに嘶(いなな)いて行人出づ、はや別れ行く横雲や、残んの星を一つずつ、鐘が消し行くいなめの、長柄堤に秋たけて、一叢(むら) 芦の風黒く、ありあけ凄き淀川水。」慶長十九年(一六一四) 京都方広寺の鐘銘事件に端を発した徳川方の無理難題は、ついに豊臣家をして窮地に陥れるところとなり、

万策つき果てた忠臣片桐且元は「我が名に因む庭前の、梧桐悉く揺落なし、蕭条たる天地の秋。……あゝ、有情も洩れぬ栄枯盛衰、是非もなき定めじやなア」と嘆きつゝ、十月一日の朝まだき、大阪の私邸を出て居城茨木に退去すべく、こゝ長柄堤(現大阪市淀川区)へとさしかゝる……。

明治から昭和初年にかけての多才な文学者坪内逍遙(一八五九—一九三五)が、明治二十七年十一月から翌二十八年九月に至るまで『早稲田文学』へ連載し、同三十七年の三月、東京座で初演されるに及んだ新史劇「桐一葉」(6幕16場)の、フィナーレを飾る「長柄堤訣別」のトップシーンである。

つまり、かつては豊太閤の信頼を一身に集めながら、その亡き後は大阪方の役人どもにも排されて、悲憤を胸に去り行く茨木城主片桐且元……彼を慕って白誓の青年武将木村重成が追いつき、今生の名残りを惜しみつゝ、且元より、紀州九度山に隠れ住む真田幸村の軍師推挙をうけたりなどして、「さらば、さらばと西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇るおぼろおぼろ、嘶く駒の声はして、此の世に残す面影は、又見ぬ影とぞなりにける。……」と囁々たる余韻とともに、その幕は降りるのである。

ともあれ、逍遙にとつてのこの処女戯曲は、シェイクスピアのマグベス的色彩を多分にあびてはいるもの、維新以降、衰退の一途をたどったわが国の伝統歌舞伎を、見事に復興

させた芸術的意義は実に大きい。そして且元が「おゝ、あれこそはお天守じやなア」と、思い入れよろしくふり仰ぐ大阪城も、今はビルとスモッグの彼方にかすんで定かには見分け難いが、その後、且元主従は河内路を迂回し、鳥養(とりかい)の渡し(現摂津市鳥飼下)を経て摂州茨木に帰城したことは、史実(「難波戦記」慶長十九年の条)とも一致する。

摂州茨木城、一南北朝時代の建武年間(一三三四—一三六六)楠木正成により築城されたと伝えられるが、その城名が歴史上に現れてくるのは、戦国初期の応仁元年(一四六七)五月、細川勝元の領主時代である。

以来、茨木姓を名乗る豪族が代々の城主として君臨していたものの、元龜二年(一五七一)八月から九月にかけての白井河原に続く茨木合戦で茨木氏は亡び去り、代って、同城を攻略した島本郡中川原(現茨木市中河原)の土豪「鬼瀬兵衛」こと中川清秀が、六万余石の城主となる。

そして天正六年(一五七八)十一月、有岡(伊丹)城主荒木村重が織田信長に反旗をひるがえすにおよび、織田側についた清秀は荒木氏滅亡の後、摂津国のうち島下、能勢、豊島、川辺の四郡を領して十二万石、まさに摂州に冠たる戦国大名にまで成り上った。

次いで天正十年六月の山崎合戦には、羽柴方の部将として明智光秀を天王山に討ち破り、秀吉をして「瀬兵衛よ、骨折り、骨折り」と

感嘆せしめた清秀ではあったが、翌十一年四月の賤ヶ岳合戦では、敵將柴田勝家の甥佐久間盛政の大軍に奇襲され、惜しくも大岩山砦を血に染めて、四十二才の生涯を花と散らしたのであった。(未完)

琵琶の今昔「青山」

田中 鵬水



「これは仁和寺御室に仕へ申す僧都行慶にて候。さて平家の一門但馬守経正は、いまだ童形の時より君が寵愛なめめあらず候。然るに今度西海の合戦に討たれ給ひ候。又青山と申す御琵琶は経正存生の時より預け下されて候。かの御琵琶を仏前に据え置き管絃講にて申し申せとの御事にて候。……謡曲「経正」の一節である。」

平経正は平家都落ちに際し、法親王より預った名器「青山」という琵琶を、京都御室の仁和寺に納めて都を落ち、一の谷の戦で通盛忠度、経俊、業盛、敦盛らと共に戦死、無念の涙を呑んだ。時に寿永三年二月七日(七八九年前)の事である。

この「青山」という琵琶は、楽琵琶中興の祖藤原貞敏が遣唐使の一員として唐に赴き、琵琶博士劉二郎に琵琶を習い、承和六年九月

来たる八月一日発行の本紙は例年の通り夏季特別号とし紙数を増して内容豊富の記事を満載、併せて暑中交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

夏季特別号発行について

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京絃援助の思召しをも含めて多数御協賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添え七月十日迄に御申込み願います。

(一三三八年)名器「青山」「玄象」の二面の琵琶を持ち帰って、仁明天皇に献じた琵琶変遷史にある。また源平盛衰記によれば「搦面には緑の梢、夏山の碧、空に有明の月出でたるよう書きたれば青山とも名付けた」とある。その昔奈良朝時代、また源平時代に「青山」を手にした琵琶の妙音に魅惑された人々が目に浮かぶ。

戦火を免れた「青山」の行方に琵琶人として、又特に琵琶蒐集者としての私は深く興味を持っていたところ、一昨年某古術商から「青山」と称する琵琶を入手した。この琵琶は旧宮家秘蔵のもので宮家の蔵に幾星霜かを過ごし、如何なる事情で巷に出たのかは知る由もないが、箱書きのある立派な木箱に完全に保管されている。私は一目見るなり「アッ」と驚きの声をあげてその琵琶に見入った。このように美しい琵琶に接するのは始めてである。搦面の皮に書かれた画の、木々の梢は鮮やかで緑々として立つ碧の山々に有明の月、これにまさしく名器「青山」である。

千百年の歴史を秘め、廻り廻って私の手に入った不思議。貞敏か経正か、又は平家の公達か、或いは宮家の人々がこの琵琶を抱いて流泉啄木の秘曲をかき鳴らしたと思われれる搦面の皮には、深く挽キズが残っている。私の琵琶コレクションも今日では百五十面にも達する。その中にこの「青山」という楽琵琶がひときわ目立って光っている。

五月五日(休)屋一時から釈迦堂花祭り催され大阪琵琶同好会が華舞台で奉納参拝者に感銘を与えた。城山一水谷旭南、川中島一矢野旭信、那須与市一光旭仙、五條橋一作花旭友、井伊大老一辻旭城、関ヶ原一石橋旭嶺、坂崎出羽守一天津八千代。外に日舞、剣舞、奇術、尺八、詩吟等十題。当日は池坊家元の献茶や生花展等が境内で開かれ春雨に煙る中を傘の波は終日絶えなかった。

永田泳渥リサイタル
四月三十日(休)屋一時と五時の二回東京芝公園内ABCホール。菊水流吟舞の会で「白虎隊」に望月嘸江氏、「石童丸」に浅野晴風氏が琵琶共演の外鈴木流泉氏が「鉢の木」の独演協賛出演で何れも好評を博した。

三位研修同志会五月例会
五月八日(休)屋一時三鷹市公会堂。門琵琶連弾一山崎錦幽、八東、伊集院、小督一中村晃、憲、族順開城一田戸桜丸、似蛾一立野岳朝、異国の丘一和大田鶴道、菅公一八東一峰、龜山上皇一清水源城、滝口入道一伊集院鼓城、野田の笛一鈴木鶴謡、見字一坂本錦道。夕五時から小宴を張り歓談の後散会した。

日本芸術琵琶会五月例会
五月十五日(休)屋一時東京新宿ピル六階。山崎錦幽氏の門琵琶その他の連弾に続いて小曲教盛、門出一坂入俊風、掛合茨木一杉山旗水、高田登水、青葉の笛一佐々木穂紅、掛合物語琵琶青山播磨一旗水、登水、長谷川錦舟、絃錦穂、坂崎出羽守一青木草水、衣川一若宮旭登、井伊大老一都錦穂、平家物語朗読一雨宮映月。以上を終り小宴の後七時半散会。

瑞鳳殿再建祝賀琵琶公演
五月二十一日(休)屋一時仙台駅前日立ファミリホール。主催東北琵琶連盟。阿部吉州氏主宰の同連盟は仙台藩祖伊達政宗廟瑞鳳殿本拝殿完成記念と久しぶりに帰国の西宮市三浦蓮水女史(夫君松野紫雲氏同伴) 歓迎を兼ねて左記のプログラムにより開催した。当日は五月晴れの好天に恵まれ聴衆の要望に添えて前奏の「石童丸」や三浦女史の名演に万雷の拍手鳴りもやまず極めて盛会裡に五時終演した。石童丸一吉州、月下の陣一桜井錦水、酒

小形錦洲、白虎隊一阿部錦仙、川中島一米竹旭栄、仙台城と政宗一阿部吉州、桜狩一吉田秋水、川上琵琶、絃蓮水、屋島の誉一吉田錦溪、政岡一蓮水、小栗栖一野本旭栄、恩響追分節一佐藤礎水、舟弁慶一南緑水、戦艦大和一三浦蓮水。外に詩吟五題。(阿部吉州記)

故半田錦樂師一周忌法要
昨年四月逝去された仙台の一水流宗家半田錦樂師一周忌法要が五月二十二日(休)東北琵琶連盟と故師一門の共催で市内の半田家菩提寺松源寺に於て営まれ故師の高弟で内弟子であった西宮市の三浦蓮水女史(一水会神戸支部長)並びに夫君松野紫雲氏を始め吉田秋水、川上琵琶女史同伴列席、又故師門下二十余名も出席され厳肅法要のあと門下数氏が追悼琵琶を献奏して在りし日の師を偲び心からの冥福を祈った。(阿部吉州記)

第六回筑前琵琶春の定期演奏会
五月二十二日(休)屋一時博多駅前大博多ビル十二階大ホール。主催博多旭蝶会、後援県市教育委員会、西日本新聞社外、司会KBC鶴原太郎アナウンサー。(五百円)。前夜来の雨上りの曇天でハッキリしな一日であったが四百の椅子席は満員に近い盛況を呈した。この会の特徴は幼児や少女少女組の演技が素晴らしいことと最初の五曲は四才から十三才までの少年少女が自ら琵琶を弾いて演奏し嶺旭蝶女史主宰の筑前琵琶保存会が年少者の育成に努力される実状を如実に物語り可愛らしく達が一生涯懸命に演ずる様は真にほろ笑ましく聴衆の中にも感激のためハンカチを顔にあてる婦人も見受けられた。一寸法師一四才一人、五才二人、八才二人、白魚の詩一六才二人、敦盛一七、八、九、十才各一人、巖流島の決

五月二十四日(休)夕六時東京新宿安田生命ホール。主催浅野晴風氏(千五百円)。天目山一諸遊清風、中山青礼、大関英子、隆盛一緒方晴舟、羅生門一本橋錦風、野口嶮水、福島辰水、琵琶舞石童丸一浅野晴風、立方永田泳渥、野々村水鏡、茨木一高田登水、杉山雅俊、琵琶弾法一鈴木流泉、霧の川中島一谷暉水、舟弁慶一晴風、山下晴楓、岩崎竜風。

復活二十一年周年晴風会春の大会
五月二十九日(休)屋一時東京井之頭浜田山会館。主催竹下翠風女史、司会竹下玲子(千五百円)。静御前一竹下秋霞、那須与市一竹下紫風、吟詠五つ木の守唄一翠風、短歌舞踊一竹下光子、立方一朗詠不尽一翠風、名月逢坂山一鈴木流泉、石童丸一前田秋声、立方一良寛さま一翠風、立方二。外に詩吟、剣詩舞、吟詠、居合道等二十一番。尺八、鳴物、振付。

日蓮大聖人劇琵琶史劇
六月一日(休)朝十時半東京日本橋三越劇場。主催青柳吉之助劇団(千五百円)。琵琶演奏安宅一小島旭濟、木村旭桂、壇の浦一押川旭

各流派合同琵琶演奏大会
六月五日(休)屋一時京都烏丸丸夷川上京都商工会議所三階大ホール。主催京都琵琶協会。晴天で三十二度の真夏のような暑さであったが会場は適当な冷房で満員に近い盛況を呈し聴衆は各流派琵琶の醍醐味を満喫して四時半終演。東京前田秋声、近江八幡野田彩水その他関係の人々と共に地下のレストランに於てビールで乾盃、軽食の後六時散会した。湖水乗切一水内媛水、桜井の駒一田中鵬水、豊太閤一荒木旭媛、本能寺一牧南水、小督の局一山岡旭清、川中島一馬場鴨水、合奏別れの盃一安住旭康、矢吹旭美津、光秀の最期一平井春嶺、禪師と正宗一林田旭城、西郷隆盛一(来賓)名古屋阿部勝水、鴨川の露一(来賓)大阪山崎旭幸、井伊大老一植村實水。

松岡旭岡七十周年演奏大会
六月五日(休)朝九時半神戸長田区上田観生会能楽堂。主催旭岡会(千円)。筑前琵琶界の大功労者で日本旭岡会(千円)長、総師範、長老の榮譽に輝く松岡旭岡氏斯道七周年を記念して門下生一同の発意により開催され東西の名手多数が熱演して近來にない盛況を呈した。秋風故郷の山一旭晃、絃旭操、山吹の夢一旭

五月十一才一人、十二才二人、壇の浦一十三才一人、吟詠懐戦友一河野淳子、合奏曲天神音頭一子供琵琶全員及び子供箏曲、茶絃録一琵琶嶺旭蝶外十一人、第二人、点前等七人、湖水渡り一西山旭雲外二人、絃旭蝶、戦艦大和、河野旭媛、青山旭子、自作錦心流小督の局、贊助出演京都植村實水(演後旭蝶会から花束贈呈)、鏡山今昔一青山旭子、フイナ一「春」一琵琶嶺旭蝶外四人、十七絃、尺八、琴各一人。四時半終演、記念撮影の後閉会。